

すぎなみ大人“熟”してる？

Jukuseru? TIMES'13

平成26年1月6日発行

発刊元：塾熟出版（事務局）

東京都杉並区梅里 1-22-32(社会教育センター内) TEL 3317-6621 FAX 3317-6620

VOL.14

永福 だがしや楽校を開こう！ 「だがしや楽校inふくにわ」のふりかえり

12月16日
月曜コース

だがしや楽校から何を生み出そう？



これまでの講座のふりかえりの語り合い

●あんこcaféを開くためのアンケート(つぶあん?こしあん?etc)を媒介に、知らない方とおしゃべりができた。物怖じせずやってみる。これが正解ということはないと気付いた。(玉田) / ●当日、魚釣りやシャボン玉を手伝った。自分の子どもと遊ぶ時を思い出しながら楽しんだ。(吉田) / ●何か地域の人たちと楽しい活動をしたかと思いつつも、はじめの一步が大変そうと思うだけで終わっていました。ところが、だがしや楽校では、皆とおしゃべりの中でいろんな活動案が生まれてとても楽しく、何かできそうな前向きな気持ちになります。自分が参加し、地域の方にも喜んでいただけたら、こんなステキなことはありません。(鎌塚) / ●“自分みせ”を出すということが少し理解できかけたところです。一番の基本はメンバーとのコミュニケーションであり、今後さらに個々の特技などを知り合えると感じています。他地域の方ともコミュニケーションができ、こちらから出向く機会を作っていただければと思います。(栗原) / ●毎回講座に出席していると皆さんの発想の豊かさや

バイタリティーとそれを実行すること(マジックハンドとでも言いましょうか)には驚かされます。自分が何をすれば良いのか、できるのか、まだ見えないまま頭の中を探ってみると、確かに色々な情報が眠っているかも、と思います。それが今の気づき。後半は頭の中で終わらせずに実行してゆくことが私の課題です。(田村) / ●だがしや楽校は、年齢・性別、なにも関係なく、それぞれの人が特技や持ち味、関心のあることを披露したり、教え合ったりする、なんでもありの楽しい場のように感じます。する人が楽しければ、来人も楽しい！真剣すぎず、だからといってだらだらでなく、子どもから大人まで誰が来て一緒に楽しめる場をつくることはいいことですね。(飯島) / ●楽しんでできる仲間が増えたことが良かった。長年だがしや楽校をやっていると、アンテナが立っているからか、「これやってみよう！」というものがふっと降りてくることがある。偶然から名人は生まれるのですね。(宮崎) / ●お手伝いで参加するつもりが、気付けばどっぷりと浸かっています。ふくにわでだがしや楽校をやろうということが、さっと決まっていたことに驚きです。(岩崎)

◆自分をふりかえり、社会とのつながりを見つける

12月14日にふくにわでのだがしや楽校を終えた受講生。今回は、このだがしや楽校を含めた11月からの講座の前半戦をふりかえる。一人ひとりのふりかえりからは、“だがしや楽校とは何か理解してきた”、“これからにつなげたい”といった声が多いことが分かる。やってみて初めて分かることばかり！(坂)

コラム~コトバを語る

このコラムでは、講座に関連するキーワードについて経験や思い出、自分なりの定義を、受講生自身の言葉で語ってまいります。第3回目は、飯島さん。

キーワードは、【多世代】

大人塾には様々な方が参加している。そして、お互いが自分の持ち味を生かして繋がっていく。それを、地域へ。今、そんなコミュニティの場が大切なのは、ずっと、この地域で生き活きと暮らしたいと思うような街づくりが。

→他地域&当日のお客さんの声

●鶴岡から参加です！
いいだがしや楽校。
加者もいろいろにぎや
楽しんでもらえたかな？
がたくさんあって楽しめ
ました！
●晴天の空の下、初冬
の笑顔が光っています。し
もつけ大人
き、子どもたちからやっ
てきました。また違った
雰囲気
●榎木くんのだがしや
塾です。いつものだがし
のだがしや楽校、楽しか
り合えたのも良かったです
●知らずに通りかかり
ごせました。ありがとうございます。
●いつも紙芝居を楽し
おじいちゃん・おばあ
開わって下さるので、と
(25.12.14) だがしや楽校inふくにわにて



だがしや楽校当日の様子
を説明する受講生→

まちなかアート発見!

～自分の言葉でアートを語る
自分の足でアートを探す～



第5回 + 小山田 徹さん

～「獲得する共有空間」をめぐる～

新年あけましておめでとうございます。本年も大人塾を何卒よろしくお願いいたします。

▼早いもので、大人塾土曜コースも折り返し。5回目は、美術家であり京都市立芸大教員でもある小山田徹さんをゲストに招いた「ツナガルシクミ」。小山田さんは、学習支援者の日沼さんが学芸員を勤めていた ACAC(国際芸術センター青森)で「ツナガルシクミ」の展示をおこなっていた方の一人でもある。聴衆を魅了した小山田さんの「共有空間」を巡る話を振り返ってみよう。



ゲスト：小山田徹さん

獲得する共有空間

- ▼「共有空間」とは何か。小山田さんは「人の存在自体」であり「新たな関係を作り、関係性を構築する空間」と言う。前回の「捨てるものから始まるツナガルシクミ」も例外ではない。捨てられるまでに経てきた人間の営みに思いを馳せ、作品をつくり、発表する。新たな関係性＝共有空間を構築した瞬間でもある。
- ▼小山田さんが語るキーワード(右図参照)は「自分たちの手で共有空間を創り上げる達成感・獲得感・楽しさ」ということに集約できるかもしれない。「誰でもできるけれども、複雑な工程ゆえにみんなの手が必要となるものは、達成感があって面白くなる」、「多様性・ややこしさが思わぬ発見や楽しさを生み出す」、「経済的、安定的な基盤が崩れつつある変化の時代を乗り越えるには共有空間が必要」…、これらを可能にするカギが「アート・芸術」なのだろう。
- ▼小山田さんのワークは人と人をつなぐ。参加者がいつのまにかスタッフになり、それぞれが役割を果たせる空間は、ついには建物を建ててしまう人々を生み出し、固定建築物だけでなく移動する空間(＝屋台)も出現、近隣住民や故郷の家族、全国津々浦々のツナガリの一端を担っている。さて、私達がそうした共有空間を創るとしたらどんな場所があるだろう? 何ができるだろう?

共有空間を巡るキーワード

人の存在自体が共有空間
関係性＝共有空間
愛が共有空間を成り立たせる
達成感がなければ愛は生まれない
労働が獲得感の鍵
多様性の創造はめんどくさいが、楽しい
選択肢に悩んだら、ややこしい方へ
関係性体力、耐力
カフェ、屋台等の飲食の力
緊急災害時に有効な共有力
変化の時代を乗り越える為の共有空間
自我実現と自己実現
未来の子供達へ

こんなばしょいいな/できたらいいな



～「ツナガルシクミ」文庫のご紹介 その2～

- ◆新刊入荷! みなさまの推薦理由カードも一緒にご覧あれ。
- 『“弁当の日”がやってきた』(竹下和男)
- 『100 Postcards from New York』(ニューヨーク・ラブズ・ユー)
- 『戦中・戦後のくらし 昭和館』(昭和館)
- 『建築雑誌 JABS』(2001/9月号: 日本建築学会)
- 『ル・コルビジエ 建築家の仕事』(フランシーヌ・ブッシュ)

- ▼5グループに分かれて話し合った「共有空間の可能性」。小山田さんも話し合いのグループに参加し、その後の発表では各グループにコメントをしていただいた。発表では、空いている学校やコインパーキング、さらには踊り場(!)という案も飛び出した。また、場所だけでなく、音楽を使おう、風車(かざぐるま)を使ってみよう、など具体的なアイデアも発表され、受講生が相互に関心を高めあっていた(文章: 瀬山)

◆すぎなみ大人“塾”してる?の発行にあたって◆ この新聞は事務局スタッフの独断と偏見と多少の事実に基づき作成しております。